
押しかけメリーさん

トカゲ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

押しかけメリーさん

【Nコード】

N0678BA

【作者名】

トカゲ

【あらすじ】

「もしもし、私メリーさん。今あなたの家の前にいるの。」

有名な都市伝説 メリーさん

これはメリーさんと数々の男女との出会いの話。

一つ一つの話が短いです。そして思いつきなので内容も薄いです。お正月なのにバイトという苛立ちと幼女への熱い思いが溢れて止まらないため再開します。

章ごとにまったく別の話になり、しかもどれも短いです。

メリーさん（前書き）

短いんだ。しょうがないよね。

全話まとめても普通の普通の短編より短いんだ、うん。

メリーさん

私メリーさん今、あなたの家の前にいるの――

・・・

メリーさんの場合

・・・

私の名前はメリーさん。

私、少し前まで遊んでくれていた水山 憐ちゃんに捨てられちゃったの。

だから、その仕返しをするために憐ちゃんのお家に向かっているところ。

電話で憐ちゃんに少しずつ近づいて行っている事を報告して恐怖を与えて行くの。

最後はどんな顔をするのかしら？見物だわ。

「もしもし、私メリーさん。今、あなたの部屋の前にいるの。」

何回目かの電話を終えて私は前を見た。

そこには憐ちゃんのお部屋の扉があるわ。今からワクワクが止まらないわ。

きっと憐ちゃんは今頃ガタガタと震えているに違いないもの。

そこに私がやってきて驚かすの。

きっと凄く驚くわ。だって捨てられたハズの私が自分で戻ってくるんだもの。

私は自慢の金色の髪の毛を触る。

隣ちゃんが毎日手入れしてくれていた自慢の髪。

腰まである髪の毛は俗に言うお嬢様ヘアーである縦ロールになのよ？ 凄いでしょ！

少し汚れちゃってるけど、まだまだ自慢の私の髪。

扉を開けて部屋の中に入ってみると部屋の中は真っ暗。

それに隣ちゃんの趣味が変わったのかしら？ 少し部屋の雰囲気が変わったみたい。

真っ暗の中に光があるわ。テレビの光みたい。

その光に照らされて見える人影・・・きつと隣ちゃんね！

少しだけ体格が違う気がするけれどこの部屋は隣ちゃんの部屋だもの、間違いないわ！

・・・ちよつと不安だけど。

そ、そうだ、電話を掛ければ分かるわ！ まあ、隣ちゃんだとは思いつけど、念の為、念の為・・・

~~~~~

電話を掛けたら前にいる隣ちゃん？の電話もなった。

やっぱり隣ちゃんなんだ！

私は隣ちゃんの後までいつて隣ちゃんが電話に出るのを待つ。  
隣ちゃんが電話に出たわ。

「もしもし私メリーさ」よう！田中、何の用だ――

「……え？」

山田くん

...

山田の場合

...

俺の名前は山田太郎、コンビニで働く23歳だ。  
今、俺はバイトから帰って深夜のアニメを見ている。

—魔法少女 ロリツ子ミルキィ—

この作品は傑作だ。絵もいいが、話も良い感じに幼女がエロエロしてて、素敵なんだよね。

ぶっちゃけると俺はロリコンだ。

まあ、犯罪は起こしていないし、これから起こすつもりはない。

Yes!ロリコン Noタッチ!!

もう社会人なんだ、そのくらいの分別はある。

・まあ、仕事っていつでもアルバイトだけだな。

アニメも終わってエンディングに入る。

主人公のミルキィが友人にケーキを女体盛りみたいな感じで盛り付けられているのを背景にスタッフロールが流れている。

毎回このエンディングは素敵だな・・・

~~~~~  
♪

そんな事を考えていると携帯が鳴る。

着信は口リ仲間の田中だ。きつとさっきまでのアニメの感想だろう。
今日の作画は神だったからな。

「もしもし私メリーさ」よう！田中、何の用だ――

「……え？」

2人は見つめ合い硬直する。

最初に動いたのは山田のほうだ。携帯の向こう側にいる離れた友人、
田中に今の状態を説明する。

「……なあ、今さ、俺の目の前に金髪の美少女が居るんだけど。」

『とうとうイカれたみたいだな。山田、眼科に行つてこい。』

酷い言われようだな。

まあ、俺が田中の立場だったら同じ事言っていただろうし、おあい
こだな

「いや、マジなんだって。美少女が居るんだって。」

『あつはつは。寝言は寝て言え。』

――ツプ・・ツーツ――

切れてしまった。まあいいか。

俺は美少女の方をみる。たしかさっき自分の事をメリーさんとか言
ってたな。

メリーさんはさっきから固まって動いてない。

「えーっと、何か用かな？」

できるだけ怖がらせないように笑顔を作りながら質問する。
メリーさんはようやく動き始め、顔を真っ赤にしながらアワアワ動いている。

・・・可愛いじゃねえか。

「ええ、ええーっと・・・ここって水山さんのお家です、よね？」
「いや？ここは山田さんのお家だよ？」

瞬間、時間が止まる。

一瞬の沈黙の後メリーさんは再びアワアワし始める。

・・・可愛いじゃねえか。

「たしか、水山さんって前の住人だよ。」

「そうなんですか・・・何処に引っ越したのか分かりますですか？」

頬をほんのり赤く染めながら上目使いで聞いてくるメリーさん。
このドストライク美少女はどこまで登りつめれば気が済むのだろう。
もう抱きしめたくて仕方ないんだが。

その欲求を俺は抑え込む。俺は紳士なんだ。

いや、もしかしたらここで乙女を抱きしめて安心させるのが紳士の
役目なんじゃないだろうか！？

「あ、あのう・・・どうかしました？」

紳士について考え込みすぎてしまったようだ。メリーさんが不安そうにこちらを見ている。

いかんいかん。幼女を不安にさせるなんて言語道断だ。

「ああ、ごめんごめん。何処かは分からないけど、海外って聞いたよ。水山さんは俺の親父の上司なんだ。家族で海外に引っ越すからってここを安く譲ってもらったって聞いたから間違いないと思うよ。」

「海外ですか・・・」

「せっかく遊びに来たみたいだけど、残念だったね。」

多分驚かせようと何の連絡もなしに来たんだろう。確か水山さんにも娘さんがいたハズだし、その子の友達に違いない。しかし、メリーさん半端無い落ち込みようだなあ。両膝についてガツクリと頂垂れている。

「私はメリーさんなのに。どうしたらいいの・・・」

「なんか大事な用事でもあったのかい？」

「私は隣ちゃんに復讐しないといけないの。だってメリーさんなんだもの。隣ちゃんを殺さないと成仏できないの！」

・・・なんて物騒な事いうのこの美少女。

この子、もしかして電波ちゃんなのか？いや、しかしそこがいい！

「もしかしてメリーさんって都市伝説のメリーさんかい？小さいのにメリーさんなんて良く知ってたね。」

ここは話を合わせるべきだろう。俺は自分の怖い話の引き出しを開いてメリーさんの事を思い出す。確か捨てられた人形が復習にくる見たいな話だったはずだ。

「うー！私はそのメリーさんだよ！証拠もあるんだから！」

メリーさんは信じてもらえてない事に腹を立てたのか腕を振りながら顔を真っ赤にする。

その瞬間メリーさんの姿が消えた。瞬間俺の背後から声がする。驚きだ。この美少女は瞬間移動ができるらしい。最近の美少女は進んでるなあ。

それにしても良い二オイだ。ナイススメル！もう辛抱できん。

「どうだ！これでわたしがメリーさんって信じてもらえたかしら！」
「うん、可愛すぎる。抱きしめても良いですか。」

俺の理性が限界突破してたまらずにメリーさんを抱きしめる。

「もう抱きしめてるですよ！？止めるです！私はメリーさんですよ！？」

「ぺろぺろしてもよかですか！？」

辛抱溜まらずにメリーさんを抱きしめてしまった。

もう止まらない止められない。

「駄目です！なんですそれ！？なんかイヤラシイです！！っていうか頼ずりするのやめてください！」

「いや、だって可愛すぎるし！ぺろぺろしたいし！したい！してもいい？しますけれど！？」

「いや、何言ってるの？怖いです！だから私は都市伝説のメリーさんなんですって！人間じゃないですから！やめて！首筋舐めないで！？」

「そんなの関係無い！愛してる！メリーさん、156年前から好きでした！」

（20分後）

「——っは！俺はいつたい何を！？」

気付くと俺の目の前には服がはだけて色っぽくなっている美少女がいた。

確か、この美少女はメリーさんだったな。なんでこんな事になってるんだ？

「うう・・全身ぺろぺろされちゃった。シャワー浴びたい。」

なんかエロイ事いつてる！？

どうしよう、ここは襲うのが紳士のたしなみなんだろうか？

そんな事を考えていると顔に出ていたのかメリーさんに若干距離をとられる。なんか心外だ。

その後（前書き）

これで終わりです。

嘘みたいだろ？これで終わりなんだぜ？

投稿したその日に最終話まで投稿するなら短編にして出せばいいとも思いましたが、適度に区切りたかつたんです。

あと気が向いたら続き書けるし。

そんな感じ。

その後

・・・

その後

・・・

「太郎さん！パンツは洗濯かごに入れてくださいっていつてるじゃないですか！」

あれから1カ月が過ぎた。

すぐに水山家を探しに行くかと思われたメリーさんはガツクリと膝をついて泣きはじめた。

話を聞いてみると、外国には出たことが無いらしく、どうしていいか分からないらしい。

だけど復讐をしないと成仏ができないらしく、これからどうしていいか不安なようだ。

そこで水島さん一家が日本に帰ってくるまでこの家に住んでみたらどうだろう？と提案したのだ。

もちろん下心もあるが、メリーさんが可哀そうになってきたのが大きい。決してペロペロしたいからの提案じゃない。

・・・実は両親が海外に出張中で家には俺一人しかいないため、少しさびしいってのもある。

メリーさんは俺の提案に喜び、遠慮がちに「よろしくおねがいしま

す・・・」と言ってきた。

抱きつきたかったのを必死に耐えた俺を誰か褒めてほしい。

「メリーさん、バイト行ってくるね。」

「はい！晩御飯はハンバーグ作りますから、楽しみにしてくださいね！」

メリーさんの笑顔が眩しい。

願わくば彼女にはこのまま恨みを忘れて幸せになってほしい。
復讐しないと成仏できないなんてあんまりじゃないか。

だから俺がその恨みを忘れさせてあげよう。そして思う存分ペロペロさせてもらおう。

そんな事を考えながら俺はバイトに向かって行った。

今日も太陽がまぶしいな。

その後（後書き）

これで一旦区切りです。

元旦に何書いてるんだろうね。仕方ないね。

でもこう思うんだ

『幼女とロリコンは正義』

ってね！

鈴蘭 燈花（前書き）

完結宣言して2日で復活！

それもこれも幼女が可愛いのがいけないと思うんだ。

鈴蘭 燈花

私の名前はメリーちゃん。今あなたの後にいるわ――

・・・

鈴蘭 燈花の場合

・・・

――トンッ

私の拳が目の前の大岩に当たる。

バコウ・・・

瞬間、聞いたことのない音と共に大岩が凹んだ。

汗が顎を伝い落ちるのが心地良い。

長時間の修行のせいで後に纏めた髪の手まで汗でべったりなのはいいだけないが。

――ふう

少し根を詰めすぎた。少し休憩にしようかな。

私の名前は鈴蘭 燈花、花も恥じらう16歳

ちょっと古武術が使える女子高生だ。因みに今は夏休みを利用して富士の樹海に修業しに来ている。

私は髪をポニーテールにしていたリボンを解いて髪を解放する。
そのまま傍にあった川に飛び込んだ。

少し冷たい位の水温だが、今はそれが気持ちいい。

ついでに素手で魚を獲り、昼食にする事にした。

塩だけの味付けだが、新鮮な魚にはそれだけで充分なのだ。

火で焙りながら塩を掛けて味付けしていく。

「うん、おいしい！」

一人でのご飯なのが残念だが、これは修業だから仕方ない。

でも、話し相手がいればこれももっと美味しかっただろうな。

メリーちゃん

・・・

メリーちゃんの場合

・・・

私の名前はメリーちゃん。都市伝説よ！

今日は私を捨てたお友達、鈴蘭 燈花ちゃんに復讐しにきたの。

何時まで経っても燈花ちゃん、家に帰ってこないから探しに来たんだけど、こんな樹海にいるなんて本当にビックリだわ。

草むらに隠れて燈花ちゃんを見ていた時に燈花ちゃんが大岩に拳を当てたの。

瞬間、変な音がしたわ。

バコウ・・・

とても大きな音！とっても大きな音だったの！

私の艶やかな黒髪が揺れのせいで少し乱れちゃったのよ！

・・・決して驚いて慌てたからって訳じゃないんだからね。本当よ。

そうそう、私の自慢はこの肩まで伸びた黒髪なの。艶やかで触り心地も抜群なのよ？

でも、これは燈花ちゃんにしか触らせてあげてないの！だって好きな人にしか触ってほしくないんだもの！

熱くなっちゃったわね。それにしてもあの大きな音はなんだったのかしら？

私は大岩に起こった『それ』を見て唖然としたわ。

だって大岩にさっきまでなかった月のクレーターみたいのが出来ているんだもの！

もし、もしもよ？あれが燈花ちゃんの仕業だとしたら・・・

私は顔が青くなるのを感じたわ。いえ、生きてるわけじゃないから元から青いのだけれど。

気分は真っ青なの！・・・元から真っ青とは言わないでちょうだい？

燈花ちゃんは川に飛び込んで・・・素手で魚を獲ってるわ。

どんだけ凄いのよ燈花ちゃん。素敵過ぎるわ。ペロペロしたい！

そつえば私が捨てられた原因はなんだったのかしら？

あんなに仲良しだったのに。本当になんてだったのかしら・・・

過去

・
・
・

過去の思いで

・
・
・

私と燈花ちゃんが遊んだのは燈火ちゃんが小学生の時なの。
燈花ちゃんは厳しい武術の稽古の後に必ず私に会いに来てくれたわ。
一緒にお話したり、私に可愛い服を着せてくれたりして・・・本当に楽しかった。

でもそんな楽しい時は長く続かなかった。

それはドンヨリとした雨の日だったわ。燈花ちゃんはその日、涙を流しながら部屋に駆け込んできたの。

私は心配で今すぐにでも抱きしめたかったのだけれど、その時の私は只の人形。どうする事も出来なかった。

それから・・・あれ？その後どうなったんだっけ？思いだせない。

気付けば土の中にいたのを覚える。

なんか頭が痛い？なんでかしら？

私は余りの頭痛のせいで隠れていた草むらから出ちゃった事にすら気付けなかった。

隠れなきゃ・・・でも、頭がいたい――

再会 前編

・
・
・

再会 前編

・
・
・

ガサリ・

草むらの方で音がしたので振り向いてみると黒髪の少女が倒れていた。

「そのキミ、大丈夫!？」

多分富士登山に来て両親と逸れてしまったのだろう。
いや、それだとこんな樹海の奥までくるはずがない。
こんな小さな子の足ではここに来る前に死んでしまうはずだ。

・ ・ ・もしかして一家心中か!？

奥まで親と一緒に来てこの子だけ逃げ出したとか？

私は胸に嫌な気持ちが溜まるのを感じた。

「・ ・ ・親のすることではないな。」

そうと決まった訳ではないがそうだったら一発ぶん殴ってやろう。
取りあえずは風通しのいいところで寝かせてやらないとな。

お腹も減っているに違いない。魚しかないが、好き嫌いは無いだろ

うか？

とりあえず固い地面に寝かせるわけにもいかない。膝枕をして起きるのを待つ。

「うーん・・燈花ちゃん——」

聞き違いだろうか？私の名前を呼んだ気がした。そういえばこの子、昔遊んだ人形に似ているな。

再会 後編

・・・

再会 後編

・・・

「・・・うん？」

「おや、気付いたようだね？」

私は幼女が起きた事を確認して安心する。
時々うなされてたし、ハラハラものだった。

幼女は私を見るなり瞳に涙を溜める。

・・・なんでいきなり泣きそうなんだろう。私ってそんなに怖いのかな？

「——ッ燈花ちゃん！！会いたかったよう！！！」

困惑していると幼女は私ですら目で追うのがやっとな速度で抱きついてくる。

・・・中々に予想を斜めに行く幼女だ。予想外すぎる。

「燈花ちゃんだ！燈花ちゃん！燈花ちゃんの匂いだ！燈花ちゃん燈花ちゃん・・・ああ！！！」

「え？ええ？ちょ、ちよっと！？」

抱きついた少女は次第にエスカレートしていき、私に頬ずりを始めたかと思うとしばらくして私の頬をペロペロと舐めはじめた。さすがに頬ずりまでは許容範囲内だが、ペロペロされるのはいただけない。

しかもときどき聞こえる少女のエッチな吐息でこっちまで変な気持ちになってしまう。

なんとか少女を離して距離をとり、事情を説明して貰う。

少女が言うには彼女は私が小さい頃遊んだ人形らしい。

捨てられた恨みで肉体を得て私に復讐しに来たのだそうだ。

「おかしいな？私はある人形を捨ててはいない。」

「嘘付かないでよ！地面に埋めたじゃない！私、悲しかったんだから。」

少女が今にも泣きそうな顔をする。

ああ、確かに私は人形を・・・いや、人形だった物を埋めたな。

「いや、うん。あれはね、恥ずかしいから話したくないんだが理由があるんだ。」

「理由？人形を埋める理由なんて捨てる以外にないじゃない！」

少女は涙をポロポロと流しながら詰め寄ってくる。

その姿を見て私は話す事を決意した。

「・・・私は古武術を幼いころからやっているんだ。」

「知ってる。ずっと見てたもの。」

「そうだったね、キミはある人形なんだったね。なら私が人の粹から外れた力があるのかも知っているかい？」

それを聞いた少女はキョトンとしている。

そういえばあの人形を外に出したことはなかったな。この少女が本当にあの人形だとは思えないが、もし人形だったとしたら会った事も無い他の人間と比較などできないだろう。私の家族は揃って規格外だから比較にならないしな。

「まあ、私はほかの人達より力が強いんだ。それで、その・・・だな。

」

うう、恥ずかしい。あの人形には可哀そうなことをしたと想っているし、思っているからこそ供養のつもりで埋めたんだが・・・

真実

・
・
・

真実

・
・
・

小さい頃、私には好きな人がいた。

だけど私には恋する時間なんてなかった。

いや、古武術を受け継ぐための修業で忙しいという理由を盾に私は逃げていただけなんだ。

今なら分かる。だけど昔は逃げていた事にすら気付けなくて・・・

だから好きな人が他の女の子とキスしている所を見て暴走してしまっただけなんだ。

涙が止まらなかった。何も考えられなかった。

すぐに私は私の友達である人形の元に向かった。この悲しみを聞いてもらう為に。

だけど人形は人形で・・・私に優しい言葉なんて掛けてくれるはずはなくて。

それに苛立って私は人形を

『粉碎』してしまっただけ――

そう、私の拳はその頃には既に凶器になり果てていた。
人形は粉々になってしまい、もはや見る影もない。

私はそこでようやく自分のした事に気付く。

私は怒りに任せて友達を粉砕してしまったのだ。もう、直せないほどに・・・

その後私は泣きながら欠片を集めて庭に埋めた。

雨が激しく降っていたけど、気にならなかった。いやむしろ好都合だっただろう。

涙を隠せたのだから。

あれ以来私は人形を買う事も人形で遊ぶ事も無くなり、自分の中にある強大な力をコントロールするための修業に全てを費やしてきた。それがあの人形に対する償いだと思いながら。

真実（後書き）

次回で百合幼女編は終了です。

少女が苛立つて人形を粉碎・古武術すげーッス。
みなさん、古武術使う奴等を怒らしちゃダメですよ！

それから

・・・

それから

・・・

私の昔話を聞き終えると幼女は涙を流し始めた。

やはり小さい子にこういう話は刺激が強すぎたかもしれない。

こう言う時はどうすればいいんだろうか？

「ひつく・・・よかったあ。私、燈花ちゃんに捨てられた訳じゃ無かったんだ。」

幼女は嬉しそうな笑顔を浮かべながら涙を流している。

どうやら心配はないようだ。私は幼女の頭に手をのせて気を落ち着かせるように撫でた。

しばらくして幼女は泣きやんだ。

そういえば名前を聞いてなかった事を思い出して聞いてみる事にする。

「そういえば、キミの名前はなんだい？」

「私？私はメリーちゃんよ？忘れたの？」

そうだ、メリーちゃんだった。

私の親友だった人形の名前は。忘れないと思っていたのに霞みが掛かってしまっていたようだ。

「そうだ、メリーちゃんが良ければだが、うちに住まないか？」

なにか避けられない事情があったにしても幼い子をこんな所に放り込む親のところになんてメリーちゃんを戻せるはずが無い。

幸い我が家は道場で部屋は余ってるし、事情を説明すれば両親も悪い顔はしないだろう。

まだこの子があの人形とは思えない。

いや、あの人形のはずはない。なんで人形の事を知っていたのかは分からないけど・・・

「いいんですの？私なんか・・・」

「もちろんだ。キミさえ良かったら、だけどね。」

私の言葉にメリーちゃんは太陽の様な笑みを浮かべて抱きついてくる。

そのままのメリーちゃんの唇が私の唇に合わさる。舌が入る。

「えっ!？」

私は突然の事に反応ができない。

メリーちゃんは未だに私の唇と舌を蹂躪している。

10秒くらい蹂躪は続き、唇が離れた時は私もメリーちゃんも息が荒くなっていた。

「不束者ですが、よろしくお願いします。」

「はははっ・・・よろしくね、メリーちゃん。」

これが私とメリーちゃんとの出会いだった。
そして私のファーストキスの終焉だった。

メリーちゃんが本当にあの人形だという事に理解したのはこれから随分先の事だけど、それはまた別の話――

それから（後書き）

これにて百合幼女編終了です。

私の所にもこんな幼女が来ないかしら・・・

メリー

私の名前はメリー

都市伝説の一つであるメリーさん、それが私。

今、私は私の持ち主だった友人である服部 天馬に復讐しに行っている最中なの。

なんで復讐？って思う人もいるでしょうね。

なんでって、あいつは私を捨てたからよ。

あんなに大切にしてくれていたのに・・

まだ信じられないのだけれど、私が天馬を恨むのに時間は掛からなかったわ。

捨てられてから数年後、『人形』だった私はいつの間にか肉体を得て都市伝説になった。

なんで私がこうなったのかは分からないけど、そんなのは関係ない。

あの日、私を炎の中に捨てて行った天馬を私は許さない。

だけど、問題があるわ。

天馬の居る場所は何となく分かる。

だけど居る場所に問題があるの。

だって天馬の住んでいる屋敷は

忍者屋敷

なんだもの

忍び込んでみよう

・・・

忍び込んでみよう

・・・

私は今、天馬が住んでいる忍者屋敷の中に侵入した所なの。
慎重に歩かないとここでは命がいくつあっても足りないのよ？

例えば今いるこの廊下、ほらこの右隅の所小さな凹みがあるでしょ？
ここを踏むと天井から槍が降ってくるの。

そのすぐ前に少いでつぱりがあるでしょ？

あれに躓いて槍が背中グサグサ刺さるっていう罠なの。

なんでそんな事知ってるかって？そんなの私が人形だった時に罠に
掛かった死体の処理係が天馬だったからよ。

長い間天馬と共に過ごした日々のおかげで私はこの屋敷の罠を熟知
しているわ。

だけど、私が捨てられてから数年が過ぎているから、新しい罠も出
来ているみたい。

まあ、天馬は罠作りの時も私を傍に置いていたから、この屋敷にあ
る罠の傾向は何となく分かるんだけどね。

「だけど、全部を避けれるほど上手くいくわけないわよねえ。」

ただいま絶賛落とし穴にドハマリ中なの。

少し下に針山が見えて泣きそうなのは内緒よ？

到着

・・・

到着

・・・

「や、やっと着いた。」

私は今、天馬の部屋の前にいる。

ここに来るまでの地獄の様な罠のせいで私のキレイな銀髪は灰色になってしまったわ。

天馬が褒めてくれたツインテールも今やポニーテールになっちゃったし。

・・・うつ、なんであんな所で日本刀が降ってくるの！？この家なにと戦ってるのよ！

扉には就寝中の札、これは好都合ね。

因みに天馬にはメリーさんお決まりの『電話でじわじわ恐怖感を与える攻撃』は実行できていないわ。

だってこの家、電話がないのだもの。連絡手段は鳩だもの。

だから連絡なしで行くしかないの。だって私、鳩もってないもの！

いけないわね、ちょっと泣きそうになったわ。

私は都市伝説のメリーさん、強いんだから泣いちゃ駄目なの！

扉を開けた瞬間、私の頬をナイフが通り過ぎた。

スパコムッ！

なんか弓道で矢が的に当たった時みたいな音がしたわ。

どうやら何らかの罠が作動したらしいわね。

冷や汗しか出ないじゃない。天馬ったら自宅でどれだけ警戒してるのよ。

再会

•

•

•

再会

-
-
-

取りあえず部屋に入る事ができたわ。

でも電話がないから事前に連絡出来てないのが問題なのよね。

仕方が無いので近くにあった紙に『私メリーさん、今あなたの後ろにいるの』と書いて天馬の布団の上に置く事にしたの。

起きないように細心の注意を払いながら布団の上に紙を置いた瞬間、私は地面にうつ伏せに押さえつけられていたわ。

何が起こったのか？簡単よ。私が紙を置いた瞬間、布団から天馬が出てきて私を押し倒しただけ。

なんて凜々しい顔で私を睨んでくるのかしら。

・
・
・発情してしまいそう。

いやいや、違う！これはあれ、このドキドキはきつと今、死にそうだからに違いないわ！だって私は天馬を恨んで殺しに来てるんだもの！

「何者だ。」

天馬の目は氷の様に冷たい。

私はその瞳に魅入られて、目を離せなくなった。

「最近はこの幼女まで刺客に使われているのか。嘆かわしいな。」

ああ、天馬が私を見て、悲しそうな顔をしてる。

私は天馬のそんな顔を見たくなくて口を開く。

「違うわ・・私、刺客じゃない。」

「ああ？じゃあなんでここにいる？」

「私、戻って来ただけだもん。」

さっきまでは刺客みたいな事しようとしてたけれど、そんなのもうどっかに行っちゃった。

今はただ、ただ天馬に抱きしめて欲しいだけ。それだけ。

「——？どういうことだ？戻って来た？」

「私よ？天馬。分からないの？」

天馬は分からないって顔してる。

当たり前だよな。だって私はちよつと前まで人形だったんだもの。

「私はあなたが炎の中に捨てた人形よ。」

「なにをいつてるんだ？」

「あなたが何時も持っていた。何時もあなたと共にいた人形、それが私。」

天馬、啞然としてるわね。

いきなりこんな事いわれたら誰だってそうなるよね。仕方ない。

「なんでか知らないけど、私は長い年月を経て都市伝説になったの。」

肉体を持った生き人形『メリーさん』それが今の私。」

そういつて部屋にあった鏡の前に立つ。

「天馬、鏡を見て。あなたには何が見える？」

「こ、これは——」

鏡には人形だった頃の私が写っていた。

「そうか、なんか信じられないが、キミがあの人形なのか。」

天馬の質問に私は頷く。

「そっか、キミには悪い事したよな。でもあれは仕方が無い事だったんだ。」

「どういう事？」

私の問いかけに天真はあの時の事を話し始めた。

過去

・
・
・

過去

・
・
・

俺の名前は服部 天馬、鞍馬隠密流忍術を使う鞍馬忍軍の中忍だ。恥ずかしい話だが、俺はいつも人形と一緒にいる。安心するからだ。

子供みたいと同僚にも良くからかわれているが、これは俺なりの平常心を保つための手段なのだ。誰にも文句は言われたくない。もはやこの人形と俺は家族みたいなもの、相棒みたいなものだ。

しかし、それは俺が上忍になる時に終わりを迎える事になる。

それは鞍馬忍軍の長からの言葉

そう、絶対に逆らう事の出来ない相手からの命令

「天馬よ・・・そなたも今日から上忍じゃ。」

「はい。」

「上忍なるもの、下の者に舐められてはいかん。分かるな？」

長の目は冷たい。俺には次にくる言葉が分かっている。いや、予想が付いている。

だけど、それは俺には最悪の言葉で、できれば外れてほしいと思っ

ていた。

「天馬よ、人形を捨てよ。それは我らには必要のない物じゃ。」

「・・・」

「その人形のせいでお前は下の者に低く見られるかもしれん。即刻捨てよ。これは命令じゃ。」

「・・・はい。」

忍にとって上からの命令は絶対だ。

これを破った者は死罪と言う事になっている。

俺は涙を流し、そして任務の最中に人形をそつと森に捨てた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0678ba/>

押しかけメリーさん

2012年1月12日10時45分発行